

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
6月号
通巻574号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



あじさい 大和郡山市 みんなの広場「らんまん」 松下広実さん絵(部分)

平成6(1994)年4月30日 エミサリーの皆さんとの座談より

続・互いに通じるものを感じて(2)

於：大本宮拝殿

法主 矢追日聖(満82歳)

参加者(発言から推測して)

石垣雅設

石垣清水

マーシャ・ボゴリン*

ユージン・パク*

ユージンの母

パトリシア・タシロ

五百木邑子

山端法玄

ジル・シチュアリー

金靄子

李章根

通訳・上野幸夫
*印の方が英語での発言

生きている時のお役目

法主 大倭教という名前がつけてあると、世間並みに言うたら私は教祖さんで、一般の人は信者さんや。やっぱり教祖が権威を持っていて上やし、信者が下の形になるでしょ。それが絶対いかにと、うちの霊界人はおっしゃるんです。だから終戦後50年経っているけど、私には一人も弟子はおれへん。同じ仲間はずいぶんおるんですが、先生と弟子という上下の関係はないんですよ。

またね、人が集まるのに雨がかかったらいかんというので平成元年にこの拝殿を建ててくれたんですが、やっぱりお金は要ります。心ある人はお金を出してくれませんが、誰がなんぼ寄付したとか一切書くなど言われまますね。金のある人も無い人もおりますから、無い人のひがみ

が出てくると、せっかく功德を積んだつもりで寄付してくれても、かえって徳をなくす。だからどこにも書いて出さないのが慈悲だと言うんです。

賽銭箱も置くなど言われるから、どこにも置いてないんですよ。伊勢神宮でも賽銭箱を置いてあるもんね。あれは河原乞食のすることやと言うねん。平安時代とかに、河原でいろんな芸をやっていると投げ銭しました。賽銭箱を置いたら、やっぱり投げ銭でしょ。それもたいてい余ったような小さい硬貨を放り込むやろ。(笑)

ほんとに心あつてするんやったら、きちつと礼儀をもって持つてこいと言うんですよ。それのうち三方だけ置いてあるけどね。

そら、うちの霊界の人は厳しいもんがあるけど、その通り実行しております。もし私が反抗したらね、すぐ引き取るよと言われる。命あれへん。怖いですよ。

(祭壇のお社について) それでこれね、拜殿でお祭りしてあるからというて神さんと違います。みな平等。(向かって) 右は稲田日女命さん。左側が光明皇后で、聖武天皇の奥さんやね。女の人ばかりや。(笑)

聖徳太子像も置いてあるの。その隣の小さいのは、誕生のお釈迦さんや。けれども、これ自身が偉い神さんでも仏さんでも何でもなし。ちよつと早う死なはっただけの、我々の友達やねん。私はそういうような態度でいるけど、罰当たったことあれへん。お祓いなんかして訳の分からん祝詞あげたりしたら、向こうの方から「お前、何しとんねん」と笑われるわ。霊界を知っていたら、かっこ悪うてそんなことできへん。(笑)

お陰さんでね、私はいわゆる人格霊といつも接して、対々の同じレベルにあります。だから、昭和の21、22年頃ここへ私が移った時に、光明皇后

さんが出て来てね、社会福祉のこんな仕事して欲しいと頼まれたんです。ここは、それ以前から私の所有地になってますけども、自分だけの意思でやっていると違いますねん。

それをしようと思つたら、金も要るし人間も要るんですけど、私みたいにするば抜けの欲無しやったら、妙に協力してくれる人がおりますねん。人間って面白いもんやなあ。実業家やったら金持つてる人ほど、金集まってくるんや。高いところの土持ちする人がぎょうさんおるから、資本家が太つていきよんねんわ。

私みたいに、何にも分からんアホみたいなやつには、また、力になつてくれる人が出てくる。何か知らんけど時が来たら必要な人が出てきますよ。世の中というのは、うまく出来てるなあと思う。結局、大欲無欲いうんかな。

だから現在の大倭の形を見ると、宗教関係が一つあります。

社会福祉法人大倭安宿苑の施設が、救護施設と特別養護老人ホーム、託老ホーム、重度心身障害者施設と4つあります。またもう一つ上の方にある有料老人ホームとは提携関係です。世の中にはお金は持つているけど難儀している年寄りもいるんやな。

建築もせんならんし、金も要るから大倭殖産という会社もこしらえました。

今度は大倭病院が出来てますねん。「病院もつくれ」というのは、40年前から言われてました。私は医者と違いますけれども、また医者の仲間が寄つてきて、40年振りて出来てますねん。神さん

拜んで病気が治ると思つている人たくさんあるけどね、それで病気が治るんやったら「病院もつくれ」とめつたに言わはらへんわ。(笑)

みな霊界から言うてこられるんだけど、金が

なかつたら出来ない。そしたら、「必要なものは、必要な時がきたら、求めずとも与えられる」と、例えば聖徳太子、あんな人がそない言います。それで実行してきたらね、その通りになってますねん。

だから私は、神さんの方では教祖、社会福祉法人では理事長、病院では総長、会社では会長や。いろんな顔があんねん。(笑)

私は座つてるだけのことやけど、決算や予算いうたらみな行かんならんし、毎日何か用事があるんでね、案外忙しいですわ。これでまた健康でいますねん。何もなかつたらもうボケてる。

私は弱い体質でね、公立学校の入学試験なんかそれではねられた。それでもまだ生きさしてもらつてますねん。いつお迎え来てもかまへん。けれど、生きてる時の一つの宿命とかね、お役目いいうのがあるんですよ。あつち行かんとこみたら、私もお役目残つてるんですよ。

団体我のある宗教団体は害悪

法主 石垣さんなんか、あつちこつちどんどん行くやろ。ほんまの話、足代はどないしてるのかなと感心しとんねん。

石垣 わあ、つらいなあ。(笑)

邑子 私も結構動いてますけども必要な時に何故かちゃんど。

法主 出来てますか。

邑子 はい。(笑)

法主 (上野さんがずっと通訳されているのを聞かれて) 何の話したはんねん?

上野 30秒遅れ位でくつついていってます。

石垣 笑い話も?

上野 笑い話は笑つてもらえない時が多い。(笑)

ユージン母 矢追先生、菊池^{たも}太母という人、ご存じですか？

法主 誰ですか？

石垣 お会いになってない。鎌倉の方に住んでらっしゃる方で、富山の浄土真宗のお寺に生まれられた方です。86、87歳になってるんですけど、私はもう何度も会ってます。私も泊まりに行ったり太母さんが私のところに泊まりに来てくれたりしたんです。その方とご親戚だそうです。

ユージン母 従兄嫁ね。姉になりますね。

法主 ああ、そうです。

ユージン母 この度、先生にもお会いして、そこにも会いに行きます。

石垣 太母さんは、一人一宗というか、自分のお寺で自分の宗派をたてて、それこそ弟子もおらんて……。

ユージン母 一人です。

法主 そら、一番いいですわ。出家さんで、尊敬できる立派な方はたくさんおられると思うんですよ。けれども宗教団体になってきたらね、私は全部善悪と見えますね。いわば宗教企業だし、ほんまに尊敬する宗教団体はありません。だから宗教団体がなくなったらええなあと思うねんけど、世の中しよがないわなあ。

禅宗でも日蓮宗でも宗教法人やもんねえ。宗教に入っている人は皆、何か人間的に修養するとか、人間的に向上するとかという心は持つてると思う。けれども、一つの団体に入ったら団体我というもの出来てしまう。やっぱり自分の宗派が一番良い、それ以外の宗派は良くないというようになる。これは駄目だと思うんです。

大倭教も宗教法人やねんけども、うちは宗教団体はありません。私には弟子なし信者なし。上下の関係はつくつたらいかんと言われます。

けれども心やすいお友達たくさんおりますから、お互い協力してやっていける者で大倭会という会はつくつております。

一人ひとりがみんな、端^{はた}の者のできないものを持つて生まれてるんです。私は私で尊いものを持つてる。あんたはあんたで尊いものを持つてる。

その尊さが平等なんだから、お互いが自分の持つている能力を出し合つて皆が幸せにいくようにしていってほしいんですわね。

邑子 それなんです！ 一人ひとりの持つてるものを生かし合つてというのがエミサリーのアー・ト・オブ・リビング・セミナーの精神なんです。

法主 とところが私みたいに、ちよつと霊界人と交流してたらね、偉い人みたいに思われるねん。何も偉いことあらへん。ちよつど魚が水に泳いでいるのと一緒やわな。まあ陸で住んでる人が、水で泳いでいるのを見たらびっくりするんやろな。けど、一人ひとり持つてるもんがある。あんたにはあんたの良さがあるし、私は私で良さがあんな。それがみんな平等なんや。

偉い人もなければ、高い人もいない。その平等観ですわね。それぞれの持つている特長を出し合つて皆で幸せにいく。これが神ながらの宗教の原理ですわね。神ながらというのは、自然の流れということなんです。

だから、あんた達には別に言わんかったかて、皆もう、その原理をよう悟つてはんねんわ。

もう一人、ここに仲間がいる

マーシャ* こうやつて一緒に座つてお話を伺っているともう一人ここに、エミサリーの仲間がいると感じます。どういふ巡り合わせか、この日に皆が一緒に集まることができて、一緒にお話がで

きることに、すごく気がいいというか嬉しいというか……。

法主 大倭にたくさん人が来ますが、みんな全部、私にとってはお友達です。だから、こちら（マーシャ）の言われていることも、これ同じなんや。また仲間がいると、そない思うんやね。

神ながらというのは、自然の流れということ。これは、アメリカであろうとインドであろうと、どこの国に行つたかて一緒やねんから、話は通じるはずやわね。

邑子 私みたいにね、あつちこつち飛び歩いていると、もう日本という国、日本の中でも関西とか、関東とか関係ないんです。地球の中のことしかない。目が覚めて今、どこにいるのかしらつて。(笑)

法主 同じ空気を吸うてるねんもの。けど、あんたほんとに元気になつたね。

ユージン母 私はマーシャさんに、「邑子さんもう死ぬ」って電話かけたんですよ。(笑)

法主 生死の境を越えてきたから、また健康になるわ。そりやまだお役目残つとんねん。

邑子 ともかく今元気だから動ける時に動きなさいという、外科の先生の判断なんです。先生自身もどつちに行くか分からないって。健康な人より動いてます。(笑)

これも皆さんのお陰です。エミサリーの友達はファックスや手紙とか電話をくれて常に祈り続けてくれてたし、日本のいろんな友達の友情とか、そういう支えが、奥底にある命に対して働きかけたみたいなきがしました。

マーシャ* 2年前の11月に日聖さんお訪ねした日に邑子さんの病気のことを聞かされました。それから2年できるようく一回りして、もう成すべきことは全部終わったという気がする。

邑子 アチューンメント(波調合わせ)って、日本時間の何曜日何時には、私達は祈りを捧げているからって伝えてくれるんです。その時間にはパッと目が覚めたりしてね。

ユージン母 愛の力だからね。奇跡のようです。

邑子 とにかく去年1年のフランクがあつて、その前の過去と今年とは違う感じがします。

石垣 「アート・オブ・リビング・セミナーには、治ってるから絶対行くから」と言つて、ほんとにここに居る。(笑)

邑子 言ってる時点では周りの人はみんな、「あんなこと言ってるけど」って。

石垣 「来てや」とか返事するけど、半分無理やろうとか。(笑)

邑子 私はこれで人間の尊厳なんていうのも消えてしまうもんだなあとと思いながら、全ては一つの経験として見つめていました。私の話ばかりで申し訳ないんですけど、食べられてお通じがあつて、それで動けるということが、どれだけ贅沢か。当たり前前のごがどんなに大事かつて、普通、皆がそれを忘れてもつと関係ないものを望んでるんじゃないかと、それをすごく感じました。そんな経験を今本当に一つひとつがありがたいです。

ユージン* 聖書の中に、キリストの前に盲目の人が連れてこられて、それを治す話があります。そして、この人が何故目が見えなくなつたのかというの、皆さんに神の愛の力を経験してもらうためですと言っています。それと同じことが多分、邑子さんに起こっているんじゃないかな。

周りの人が気付くんですね。周りの人達が、お父さんが悪人だったからとか本人が悪いことをしたからとか、盲目になつて当然だ、結局、罰が当たつたのだという答を期待していた。キリストが言つたのはそうではない。神の愛の力を見せるた

めに、そういう役割を持って目が見えなくなつて
いるんだと。(続く)

文責・編集部

平成6年4月30日の
法主様の日記より

※午后二時、野草塾の幹部と面談五時三十分まで
(欄外の、その日の主な出来事の小見出し)

二時すぎ清水さんが茶の間に来る。揃つて居るのでお願いしますと云つて地球儀をもって下りて行つた。続いて予定表をもつて降りて行つた。十人余り集まつていた。韓国からの人は四人ほどいた。エミサリ共同体のマーシャ女史の他に女性が二人も居た。上野幸夫さんが通訳してくれる。四日までのセミナーのようである。

朝、愛善苑に集まつて、午后大倭へ来たという。後から五百木邑子(51才)通訳が元氣に入つてきたのには驚いた。山梨に居たころはもう癌で再起不能と云われていたのが元氣な顔で見えたからである。奇跡の人の思(い)がした。先回来たユージンさんの母、李一仙さん、七二才、日本の女子大学卒業の方のようだ。また禅の出家さんで外国へ座禅等の指導に行かれていた山端法玄氏も見えていた。今日の集まつている方々は神ながらの道に添う心の持主の方々で、話は氣楽にできる人々だった。

私の八紘会時代の話も出て一寸しんどい思いがした。小磯大将が朝鮮総督に行かれた時の話も聞かれた。

明日は中村宅の法事に参るので失礼すると云つておく。四日まで続くから、その時間があれば顔を出す云つて五時三十分切上げる。

(編集部注) 日記のことなのでそのままに。
たゞ旧漢字は常用字体にした。

時の波蕩(その23)

平成30年4月22日
第337回大倭会文化行事報告

大阪府枚方市 林 修 三

今回は、同一場所への2度目の訪問となつた。午前10時、京阪電車「清水五条駅」に集合された方々は8名。暑くも寒くもない絶好の天候の下、京都東山の清水寺へと赴いた。訪ねるは——千二百有余年前、おおしくもはかなく散つた東北の英雄阿弖流為、母礼の兩人と、彼ら二人の宿敵でもあり、後に親交も結んだと思われる坂上田村麻呂、そしてそれら英傑達と共に戦に臨んだ数多くの方々があつた。

無論、清水寺そのものが田村麻呂の創建であり、征夷大將軍で觀音信仰にも篤かつた田村麻呂自身の心の葛藤に反映された、幾多の戦に亡くなつていった敵味方の靈を慰める目的を持った寺院である。そこに田村麻呂を祭る「田村堂」とアテルイ、モレを鎮魂する碑があり、それらを訪れ、彼らに縁ある人々を慰霊し、彼らに心を寄せるのが今回の大倭会文化行事の目的の第一であつた。

思えば前回、文化行事中最多の47名もの方々と共に清水寺を訪れてから14年の歳月が流れ去つていた。アテルイ、モレや桓武天皇、田村麻呂の物語は、過去に『おおやまと』紙に記されている。お氣持ある方は、そちらも読んで頂けると幸いです。

- ①平成15年4月号「こもれる魂魄の地を訪ねて(13)」杉本順一……アテルイ、モレの処刑場と比定される枚方市牧野の地への有志の慰霊
- ②平成16年5月号「第278回文化行事報告」

林修三……前回の清水寺への文化行事

③平成17年7月号「第284回大倭会文化行事報告」杉本順一……田村麻呂の墓への文化行事

④平成17年10月号「時の波蕩(15)」林修三及び「こもれる魂魄の地を訪ねて(22)」杉本順一……アテルイ、モレの故郷胆沢への有志の旅

アテルイ、モレとの私の縁は、平成15年の2月頃、杉本さんの依頼を受けて枚方市牧野公園にある塚を訪れた事に始まる(前記①)。当時はまだ現在建立されているような石碑もなく、ただ公園の真ん中の一本の太木の側にこんもりとした塚らしきものがあつたにすぎなかつた。訪れてみて驚いた事に、そこはその数年前、隣の八幡市に引越してすぐ、何らあてもなく自転車に乗って訪れていた場所であつた。これという案内板もなく、塚らしきものを前にして多少のインスピレーションを受けてお祈りをし、帰つた場所であつた。アテルイ、モレという存在も知らず、ましてやそこが彼らの処刑場である事にも思いは到らなかつた。

私事ではあるが、枚方は我が先祖の代々住まいした土地であり、そのことも私なりに深く縁を感じる要因の一つである。千二百年の昔、ひよつとしたらその処刑の場に私の先祖の一人が何かの理由で立ち合つていた事も可能性があつた。又、15年前杉本さんの依頼を受け牧野公園を訪れた折、その辺りに何ら土地勘もなかつた私は、まるで何かにひっぱられる如く牧野公園から狭い住宅街をぬけて、1kmほど先の別の公園近くにあるとある竹藪へと導かれた。

その時、前ぶれも知識もなく、そこがモレの墓地である事を感じた。もちろん、どの文献にも彼らが別々に葬られたとの記述はない。私の妄想にすぎない事かもしれないが、そのゴミの山と化した

ていた竹藪の一隅を見つめながら胸のつまる思いがした。以来、私は年に一度は牧野公園やその近くの竹藪を訪れ、私なりのお祈りをしている。又、毎日の如く仕事の行き帰りに利用する京阪電車が、「牧野駅」を通過する度に、気持をお二人やお二人に縁のある方々に向けている。

その様な思いが重なり、春の文化行事の一つを任されている私は、今回の清水寺行きを決めさせて頂いた。さて当日、年齢も気にかかるころ五条坂を軽々と登り、「田村堂」やアテルイ、モレの碑(写真下)を巡り無事に慰霊を済ませた。

その後、三年坂にあるコーヒーの名店「イノダ」で一休み、七条大和大路正面通り近くの私のなつかしの洋食店でランチにして、そこから歩いて数分の「河井寛次郎記念館」で豊かで静かな時間を過ごし、近くの最近大人気の古民家カフェにも立ち寄つた。そして中本好子さんの強い希望で、予定にはなかつた枚方牧野のアテルイ、モレの塚まで、あろう事か皆一緒に赴くことになった。(後でお聞きすると、石川君子さんのその日の万歩計は1万3千歩近くになつたとの事)

皆さんのアテルイ、モレに対する思い入れの深さに嬉しくもあり頭の下がる思いもした。同時に、これぞ大倭会文化行事!との感があつた。

第338回大倭会文化行事報告 平成30年5月20日

樹医 山本光二さんを訪ねて

『やわらぎの黙示』279頁の「涙の掛橋をゆく」に、法主さんは、木枯らしが吹く晴れた冬の屋下がり、鳥が啄ばんだ柿の実を、山の加美さんに感謝しながら宝物でも拾った気持ちで撫でくり回していたとき……こんな風に書かれた文章がある。

《その瞬間だった。二本しかと結びついた松の

牧野公園の塚に参り、私の妄想かもしれないモレさんの竹藪も巡つた。竹藪周辺は、私が最初に尋ねた時と変らぬ姿ではあるが、ゴミがなくなり美しくなっている。ただ、溝口ツヤ子さんが、「残念だ!」というモレさんの思いを強く感じられたという。現在のお二人の思いが鎮魂されつつあるとしても、歴史的なその時、その場所での思いの深さはやすやすと鎮まる事はないに違ひなかつた。ハードで長い時間を費やしたであろうこの日、牧野を去る頃にはすでに夕刻となつていた。しかし参加者の胸の内には晴れやかな何かが残された様であつた。最後に、私が感じた又してもの妄想を記してこの稿の終りとした。

「われらが名、アテルイ、モレにはちがいないけれど、当てる漢字は以下と銘記されたい。「天照日」、「真麗」是なり」



天照らす
日高見の国
真に麗し
愛しきヒト等
愛しき山河
いつの日にか又、
約束の胆沢の地へ、
大倭の皆様と共に。

あじさい色 李章根

枯葉が、強い勢いで首筋からもぐり込んだ。冷たく痛みさえ感じた。これにも神慮があると思ひ、「ああ、済まない、済まない。お前らの恩は片時も忘れたことはないよ」と語りかけながら梢を見上げると、その古びた幹を庇うように斜光線を浴びた真赤な紅葉が穏やかにゆれ動いて、まるで手招きしているように見えた。自然は美しい。調和

の姿は更に美しい。人はこの天然の心の中で生かされている。」

《私達がこの須加の霊地に居を移したころ、私とその記念に手ずから植樹した小さな松・榎・楠や桜・梅・楓などは、大倭の神地、五百年、一千年先の風景を夢に観ながら、その種別に応じ、その最も適切な場所を選び、わが心情を懇ろに言いふくめて、入念に、一本また一本と、農事の余暇を見ては定植したものだ。大倭三十一年(昭和五十年)も早や暮れに近づいた。庭に佇んであたりを見渡せば、見るもの触れるもの、そのすべてに私の祈りがあり、託した私の心がある。》

矢追家麻呂教長さんの話では、大倭には注連縄をはっていなくてもこわい樹は何本かあると話され、中島健さんも、法主さんが大倭の樹木たちに心情を言いふくめていると言われていたことを覚えていた。木にまつわる話はどこからともなく大倭の暮らしの中から聞えてきます。

当日11時20分快晴。大阪府交野市、京阪電車「私市」駅。爽やかな風に迎えられて参加者14名。駅前の宝寿司で早速昼食。時間は十分取ってあったので、法主さんが、私市の天孫降臨の地とされている河上・時峰や磐船神社、または古木などについて書かれた『すさのお』(21号から23号)を回した。ゆったりはしたが一時間待つてようやくの食事。急いで食べた。すごく美味しかったが、講師との約束の時間に遅れそうだったのでだんだん味はつきりしなくなってきた。

赤子の泣き声に、思わずハッと目を覚ます。あこの声は昨夜生まれきた子だ。階下から聞こえる元気な声。

あと足あと

迎えること、送ること

徒歩20分、山満造園に予定の1時半ピツタリに到着。参加者1人加わり15名となる。事務所の3階で待つて下さっていた山本光二さん(昭和28年生・日本樹木保護協会代表樹医)ご夫妻にご挨拶し手土産のお饅頭を渡すが、山本さんはすぐに参加者に配られた。早速交流会が始まる。当初、参加者からの質問を受けて答える形のぎくばらんな集りの予定だったが山本さんは、樹医の仕事の実際や日本で初めて樹医を志され、生涯をかけて木の治療に全力を傾けられた山野忠彦さんや、山本さんの父親満さんのビデオをみせて下さり、様々な経験や木にまつわるエピソードを語られ、質問にも丁寧に答えて下さった。(写真8頁)

樹医は木を触診し地域の環境や人々と木とのつながりも含めて診断。内科、外科治療をされ保存を考えていく。それは、木は歴史の証人であり、自然環境のバランスを一生懸命保ってくれているという実感からである。樹医は木の声に耳を澄ませ、「必ず治してやるからな。今ひとときは手当てで痛いかもしれないが、必ず治るまでつきあつてやるよ。将来大きく立派に繁つてくれ。」

と木に触れながら話し掛けるのだという。このような念いも、山本さんは大病を経験する中で、愛情を込めて接していたつもりから、「決意のような自分への覚悟」になつていかれたようだ。著書の中で、「相互の気持ちを通いあう、そんな関係で治療が行えるときはとても気持ちよく、状況が次々と変化しても、対策も処置も順次、的確に

でき、よい仕事ができます」(「樹医をめざすあなたへ」Gakkein)と書かれている。

山本さんは、「木には寿命がないんです。私達が治療をするというよりは、木自らが生きよう治ろうとする力を阻害するものを除き、条件を整え手助けをします。木は劣悪な厳しい条件でも順応しますが、自殺する木はない。しかし、今は自然環境のバランスを一生懸命保つてくれている木を、心の芯から残そうと念わなければ、人間による利便性の追求から守れない」と話されました。

山本さんの師である山野忠彦さんのエピソードや樹霊の話、日常の剪定や木の病気の話。100年から150年で一步步く樹木の話などは実に関心を引き、故に私達からの質問もとぎれなく続きました。

「木のことまで考えた暮らし方に思いを馳せることができたなら、それが地球の未来を握る鍵のように思えてなりません」。そして、「何より私を受け入れてくれた樹木たちに心からお礼を言いたい」と著書で締めくくられています。

「何か木がいつもとちがつて見えるような気がする」参加者の呟きが聞こえる。何気なく見ている樹木の存在が、心と心で通じ合え、地球上に生命を戴いて共に助け合つて暮らしている仲間なのだ、僕自身の視座を少しでも移すことができるなら、この度の文化行事を意味あるものにしていくのではないかと思います。

参照…『木の声が聞こえる』山野忠彦著 講談社

鹿児島県屋久島 手塚木咲

寿命を全うしてあの世に還ると同じ様に、あの世からこの世へとやつてくる、人生において定められたプロセスだ。

私は、このプロセスの始まり、「お産」に魅了されて助産師が続いている。今日までじっとお産のそばにいて、一人の人間がこの世に生まれ出てくることの当たり前の出来事と、その不思議な奇跡に、毎回感動し神秘を感じずにはおれないのだ。ここに書かせて頂くことは、個人的な感想でしかなく、とてもあいまいで抽象的ですが、一つの声として読んでほしい。

生まれてきた赤子をじっと見てみると、段々と「この世の人」になってくる様が、良く分かる。にゆるりと産道を通って出てきて、この世の空気をプーと一呼吸吸うと、皮膚が赤みを帯びて活き活きと輝きます。生命力そのものがほかほかと湯気を立て、見える様だ。私は、産道の向こうは「あの世」だと思う。あの世からこの世へ生まれ出て、この世の空気を吸い、一息すると目を開けて周りを見渡す。その姿は何とも神々しく、容易に触れてはいけない者の気配だ。少しすると、母のおっぱいを探し出し、吸う。この世の食べ物を取り込み、また一つこの世の地に近づく。更に、この世の衣を纏い、また一つ。更にこの世の水(湯)を浴び、また一つ。一つ一つこの世のモノを取り込み、その目に力がこもってくる。それが大体5〜7日間。しっかりとおっぱいをお腹一杯に飲むようになると、この世の大地に生きる根がつかまった安定感がある。一か月もすると、もうすっかり「この世の人」の顔だ。

この一連を見てみると、日本神話の「黄泉戸喫」を思い出す。イザナミは、黄泉の国の食べ物を食べたからもう現世には戻れない。その地の者となるのだ。あの世からすると、現世の方があの世だろ。又、誕生後の赤子の初めてのお祝い、「お七夜」というのも至極納得できる。命の根がこの世に根付く七日目、あの世からこの世にお迎

えした最終的な名づけのお祝いだ。又、もう一つのプロセス、この世からあの世へ還ることについて。

母の胎内で寿命を全うする命もある。又は、生まれてすぐに亡くなる命も、ある。

ある子は、先天的な病気があり、早産の可能性が高く現代の医療でも生まれてからも治療が難しい状況であった。その子の両親は悩んだ末に「この子の自然な流れを尊重する」という選択をされて、妊娠期間の一日一日を本当に慈しむように過ごされた。そして陣痛が始まったのはやはり早産域で、一般的には一分一秒長く生きてもらおうとすると、最新の救命措置が必要になる時期であった。しかし、母は来るべき時に来た陣痛を受け止め、薄暗いお産の部屋の布団の上で一番楽な体勢をとり、家族の見守る中、赤ちゃんを迎えた。「あつたかい、かわいいかわいい」。赤ちゃんのそのまの命を胸に抱き、母は喜びの声をあげ、赤ちゃんもそれに答えるように身じろぎをし、小さな産声をあげた。そんな家族の時間のしばらく後、お母さんが「多分今心臓が止まったから診てください」と穏やかに言った。赤ちゃんは、お母さんの温かい胸の上で、彼の持てる身体の全てで生ききり、この世からあの世へまた還っていったのだ。はたして、この赤ちゃんが、救命措置をして一秒でも長くこの世に留まることを望んだか、手出しをされないことを望んだかは、本当に分かからない。しかし、私は全くの自然の流れの中で亡くなること、そのままの命の流れを邪魔しないことの尊さをとても強く感じたのだ。医療のルールにのらない選択もある。

生まれていように生まれさせてあげたい、同時に、亡くなりたいように送ってあげたいと、シンブルに思う。

もう一人、あの世への還り方を見せてくれた大切な人がいる。私の祖母だ。九十歳、元氣な方だった。体調を崩し約一月で逝ったが、祖母の病気が分かった時、父の兄弟姉妹は話し合い、自宅最後まで看ること、自宅から送り出すことを決めた。それから在宅医療の手続きをし、私たち孫も入れ替わりたち替わり祖母に逢いに行った。祖母を自宅に迎えてから、父・賢至が初めに取り組んだのは、家の掃除と床の張替えだった。「ばあちゃんはやっぱりきれいな床で送りたいじゃないですか」と、当たり前のように言った。自分の母を送る準備を、今、祖母が生きている同じ時間の中で進める父に驚いたと同時に、その行動はとても健全である気がした。

私は、医療者でありながら何となくつかみきれないなかつたどこかでも窮屈に感じていた。「死ぬ」ことについてと、「送ること」の本質について、一つの答えを見た気がした。

食べ物や水を受け付けなくなつて、少しずつ命の根が離れていく祖母と日々会話しつつ、一本一本、釘を打っていく。祖母は、叔父の「送るための詩」の朗読に乗って、遠浅の海に寄せては引く波のように、ゆっくりと呼吸を引き取っていった。葬儀は、真新しい杉の床板の清浄な香りに包まれて、行われた。

今、様々な体験が少しずつ、私の中で重なりつつある。少しずつ今までの事柄が繋がりがつつある。この先に私のつなげていくべき道がある気がするが、それはまだ明白には見えない。

人が生まれてくること、生きていくこと、還っていくこと。それぞれに生まれ持った流れがあるはずだ。私はその流れをじっと見つめていきたい。それぞれの持ついのちの流れの輝きをそれぞれの行き着く先へ、見届けたい。

あじさい日誌

5月11日 紫陽花邑の桜に殺虫剤散布が行われました。

5月13日 祝会。喜多村和入さん(奈良県天理市)が初参加。自分にとっての宗教とは何かをテーマに話し合われました。

5月15日 大倭神宮月次祭。喜多村和入さんが初参拝。

5月19日 午後、交流の家でF1WC定例委員会。

5月20日 文化行事の詳細報告は5頁。その時の写真です。



5月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和45年5月23日の法話をお聞きしました。

5月26日 午前11時から『おおやまと』編集会議。法話のCD化が進み、1年分セットの形で、月次祭をしていると聞く新皇教宮や田中二三さん宅(岡山県真庭市)に送りました。

5月29日 午後、大倭病院会議

室で大倭病院の29年度・大本宮一般会計の決算報告会議。
6月6日 大倭神宮月次祭。近畿も入梅。

6月8日 大倭会会員だった向井弓子さんの帰幽はみな後日に知りました。一度お参りをという気が合って、坂田洋美・中本好子・岸野春子さんが京都府亀岡市のお宅へ。命日は昨年2月9日、63歳だったとのこと。

6月10日 祝会。溝口邦子さん(大阪府岸和田市)と中学・高校時代の同級生2人も飛入り。ざっくばらんな座談会となり何も知らないで来た人に、大倭の味はどう伝わったでしょうか。

大倭安宿苑では
5月10日 茂毛蒔園あじさいホールで法人成立62周年記念式典が行われました。

(菅原園)
5月26日 地域交流会を開催。

(須加宮寮)
6月3日 法人卓球大会。

(長曾根寮)
5月22日(日) 外出会で生駒の足湯を楽しみました。

5月24日(特養) 誕生会で4名の方(内傘寿1名)のお祝い。

(茂毛蒔園)
6月3日 法人卓球大会ころがしシングルスで優勝と準優勝。

(八重垣園)
5月10日 昼食は法人成立のお祝いの手作り弁当。

こたまこたま

H30・5・29

京都府宮津市 藤本 宏秋

▼先程、何気なく過去の『おおやまと』をパラパラとめくって見ましたら、伊根の舟屋が表紙写真になっている平成20年5月号(ちょうど10年前の号)に目が止まりました。

「関連文を確か書いたよう?」と中身を読むと、逍遙遊のコーナーで地縁と血縁のことを書いていたのでした。自分の書いた文章を読み返してビックリ。

今日(5/29)は祖父が京都府伊根町から身延山久遠寺まで歩いてたどり着いた満願の日時でした。昭和11年のことですから、かれこれ82年前? ありがとうございます。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

7月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第594回祝会

7月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

※8月の祝会は例年通り大掃除祝会です。8月18日(土)でどうぞよろしくお願致します。

*月次祭(大倭神宮)

7月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)

7月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

たいことです。

▼ところで先週(5/22)濱崎加奈子さんのご縁で談山神社へ談山能を観に行ってきました。

駐車場に着いたら、目の前をどこかでお会したような男性が歩いていました。記憶をたどると、1週間前(5/15)、大倭神宮の月次祭に初めて参拝されていた岐阜からの青年でした。

その時は、社務所に上がらずにすぐに帰られたので、会釈しか出来なかったのですが、「先週、大倭神宮で会いましたよね」と声をかけると、ビックリされました。

ちなみに談山神社を訪ねるのは初めてのことでだったので、上演後、中大兄皇子さんと中臣(藤原)鎌足さんが大化の改新の前に語らったという語らい山に登って、ご挨拶してきました。

帰宅してから、何となく大倭文化行事で天智天皇陵を参拝したのはいつだったかなあと考えていたら、湯浅芳郎さんからいただいた写真が出てきて、後ろを見てビックリ。平成17年、つまり13年前の5月22日に参拝していたのでした。この日時の符号は、何だか嬉しいものです。

東光大祭 祭典のご案内

平成30年8月25日(土曜日)・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わる次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭のあいだ拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等を聞いたり見たりしていただきます。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は

8月5日までとさせていただきます。